

タイトル無題

戦闘工兵（元）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし荒野のコトブキ飛行隊の二次を連載するとしたらこんな感じの主人公になると思うのでテストがてら。（とはいって世界観設定がまだ完全には分からないので書くのは難しい）

序
章

目

次

1

序章

それが“祖国”を護る為だと信じた。

それが“家族”を護る為だと信じた。

それが“軍人”が歩むべき道だと信じた。

それが“男子”が歩むべき道だと信じた。

「——お先に参ります」

「——どうかお元氣で」

熟練搭乗員と比すれば飛行時間が雲泥の差の若手の搭乗員達が機体の胴体へ吊るした250kgの爆弾が放つ鈍い輝きとは正反対の目映いばかりの笑顔で敬礼する姿に彼は一瞬、何と返答すれば良いのか言葉に詰まつた。

「——必ず貴様らを敵艦隊まで送り届けてやる。後ろは気にするな。全ての敵機を叩き落としてやる」

その言葉は彼等ではなく、自身へ言い聞かせるかのようだつた。

南洋へ跋扈する敵艦隊へ必死の作戦の為に出撃する搭乗員が駆る片道だけの護衛任務を仰せ付かり、日々見送るだけの毎日は酷く心身を磨り減らした。

雲霞の如く押し寄せる敵機の群れに散々と追い回された末に主翼を碎かれ、敵艦隊の対空砲火で押し潰された必死の機体が何度、火の玉となつて蒼穹へ散つた姿を見たのか。

海面へ叩き付けられる寸前の機体を駆る若い搭乗員が万歳を唱え、懐かしい母を呼ぶ声は幻聴のようにけたたましい発動機や機銃の銃声へ紛れて聞こえて来るようだつた。

それが目に見えない „何か“ を護る為だと信じたかった。

一通の電報は無機質な羅列で家族の死を報せて來た。

開戦から „祖国“ を „家族“ を護る為に、この国に生まれた „男子“ として „軍人“ として戦う事が本懐であると信じて今日まで戦つて來た。

あれほど焦がれた蒼穹の空を駆る飛行機——その操縦桿を握り、一個の部品と化してまで戦つて來た。

辛うじて彼を繋ぎ止めていた軍人としての矜持か、或いは男子としての誇りか。

それらがぷつりと音を立てて切れた瞬間、彼は膝から崩れ落ち、声を押し殺して涙を流した。

男子が涙を流すなど怒る、厳しくも優しい父親はこの世にいない。男子が泣いてはならない、と困ったようにだが慈悲の微笑みを浮かべて頭を撫でてくれる母親はこの世にいない。

兄が泣いていると心配し、釣られて泣き始めてしまう歳の離れた可愛い妹はこの世にいない。

——護りたかつた „家族“ はこの世にいない——

それがやつと理解出来た彼は、一頻り涙を流すと深い溜め息を吐き出してふらふらと立ち上がった。

嗚呼、と彼は眼前の光景に安堵の溜め息を吐き出した。

やつとこの日を迎えた彼は、一頻り涙を流すと深い溜め息を吐き出してふらふらと立ち上がり、上方へ向ける。

——今日も良く晴れてる。

初夏が近い事を知らせる蒼い空が広がっている。

散華するには良い日和だ。

上官の訓示が終わり、搭乗員一同で敬礼と遙拝を行い、各自の乗機へ駆ける。

墨書きされた鉢巻をきつく飛行帽の上から縛りながら彼は世話になつた機付員へ礼を告げ、暖氣の為、発動機が唸りを上げる機体の操縦席へ滑り込んだ。

「――やつと……」

全ての苦から解き放たれる事への安堵か、それとも“家族”的下へ逝ける事への安堵からか。

溜め息を口元を覆つたマフラーの下で吐き出す彼は左手を置いた絞糸把柄を徐々に押し込んだ。

艦隊の防空網へ僚機が次々に突入する。

対空砲火の炸裂が蒼穹へ弾ける。

あともう少しすれば全てが終わる。

彼は絞糸把柄を一杯にまで押し込み、頬み込んで片道分しか入れて貰わなかつた燃料を発動機へ送つた。

一層強く発動機が唸りを上げて回り出す。

まるで馬に鞭を入れたかのように彼が駆る機体の速度が増して行く。

海面スレスレ一歩少しでも操縦桿を前へ倒せば海面へ突っ込んで

しまう程の高度を保ちながら彼は遙か向こうに見える敵艦を睨み付ける。

敵艦隊の中央を航行する敵空母へ狙いを付けて突入する彼の機体へ対空砲火の曳光弾が束になつて向かつて来る。

海面の反射で信管が誤作動を起こし、明後日の方向で炸裂する砲弾や海面へ突つ込んで水柱を上げる砲弾の雨霰の中を彼は一本の矢の如く突入する。

砲弾の破片がガンガンと機体を叩く度に振動が激しく操縦桿を握る手を揺らす。

敵艦まで残り僅か。

彼は左手で無電の電鍵を強く押し込んだ。

そのツーナーという長音を遙か遠くに離れている味方が拾つているか否かは彼に取つてはどうでも良かつた。

瞬きをする暇もなく見る見る敵艦が接近する。

彼の鍛えられた眼が豆のような大きさにしか見えない対空砲へ取り付いている敵兵の鬼気迫る表情まで捉える。

機体の間近で炸裂した敵弾が風防を貫通し、頬を破片が切り裂き、右腕に突き刺さるが彼は操縦桿から手を離さなかつた。

目と鼻の先にまで敵艦が迫り一ふと時間の流れがゆつくりとなる。

嗚呼、と彼は全てを察した。

これが走馬灯という奴か。

幼い頃から現在までの出来事が思い浮かんだ。

父には良く叱られたが、それ以上に自分の事で色々と心配と迷惑を掛けてしまった。

母にも迷惑を色々と掛けてしまつた。

なにひとつ孝行が出来なかつた事への後悔が胸を突いた。

妹は歳が八つほど離れていたが父や自分のように人相が悪くなく、母に似て愛嬌のある顔となつた事が幸いだつた。

入校してから何度も帰省したが、あまり構えてやれなかつた事への後悔が胸を突いた。

良き息子、良い兄ではなかつた事をなんと詫びれば良いのか。

怒られるだろうか、それとも呆れられるだろうか。

だが——それも良いだろう。

時間はたっぷりある。

時間をかけて謝罪すれば良い。

そんな考えが浮かび、ふつとマフラーの下で笑いを溢した刹那、彼の視界は暗転した。